

教育史学会第42回大会の感想

佐々木 享

技術教育・職業教育の分野を専攻しているに過ぎない私が、毎年当学会の大会に参加することを楽しみにしているのは、未知の分野の研究の世界を知り得るだけでなく、当学会における研究発表やその討論には、方法論という点での厳しさがあり、その意味で学問しようとする者の醍醐味を味わえる期待があるからでもある。しかし今回聴いた報告は、私の関心が深かった8本に過ぎない。かねて期待した中等教育史関連の報告は、不調だった体の調子が限界にきた感じがあったので、止むなく失礼した。気のせいかな、近年、技術教育・職業教育の分野の報告は増えているように思われたのは嬉しいことだった。

抽象的な言い方で恐縮だが、せっかく史料調査はかなり綿密なのに、対象としている事象を規定することばを選ぶ努力に欠けたり、安易なことばを採用する傾向がある、と感じさせる報告が二三の若い人の報告に目立つように思われた。どう規定するかは史的研究の究極的な目的の一つである、という緊張感が欠けているように感ずるのだが、と率直に述べたところ、懇親会の席で積極的に話かけてきて下さったことには好感がもてた。

中央教育審議会資料など分散所蔵されている「森戸辰男文書」はできれば一括して利用できるようにしたい、という第一級の史料の扱いに関する羽田貴史会員の報告については、史料の扱いに一家言をもつ寺崎昌男、佐藤秀夫、渡部宗助の各会員が熱心に意見を闘わせた。私からみて今次大会随一の圧巻だったのではないか、という感想をもった。

「教育学説史の再検討」というテーマを掲げたシンポジウムには、期待があった。しかし同時

に、「再検討」というからには一度は検討され定立された学説史があり、それを見なおすという課題が設定されていることになるけれども、私のつたない理解をやや乱暴に言えば、教育学の世界には再検討の対象となる「教育学説史」というべきものは見当らないように思われたから、このテーマには、最初からやや奇異な感じも禁じ得なかった。実際、報告者の一人の牧野会員は、中国教育史研究の分野では、これまでのところ、教育学説史研究というべきものは見当らないと繰り返し述べられた。

しかし各シンポジストは、予稿を含めて、設定された課題に沿っていわば真正面から取り組む努力をされた、と私には理解された。それにも拘らず、期待外れの感を禁じ得なかったのは、19世紀後半から1920～30年代という時期設定や、この時期に一定の学をなすに至ったかに見えるアメリカをのぞいたためかも知れない。いずれにせよ、学説史を語ることは、つまるところ報告者自身の学説を語る性質の課題であるはずで、それ抜きに学説史は語れない。期せずして討論が吉田熊次あるいはケルシェンシュタイナーの歴史的評価を問うたのもそこに帰着していた、と私には感じられた。